



三同建設の窪田取締役は「解体作業の遠隔化・自動化は業界でまだ進んでいない」と話す

2つ目の狙いは職務の選択肢を広げて従業員の満足度を高めることだ。三同建設の社員は解体現場の解体を担う施工管理者と、営業や経理といった本社勤務の社員に分けられる。本社にしながら遠隔で重機を動かす仕事はこれらとは違った面白みがあり、従業員にとって魅力になりうると三同建設は考えている。就活でも重機の操作を体験してもらうなどアピールに活用する予定だ。

国土交通省はICT（情報通信技術）で生産性を上げる「i-Construction 2.0」で、40年度までに23年度比で3割の省人化を目指すとしている。三同建設も10年後までに一部の作業の自動化を目指しており、遠隔重機の導入はその第一歩となる。三同建設の窪田良章取締役は「土木や建築で大手ゼネコンによる新技術の導入が進むが、解体業も変化が必要だ」と話す。